

東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会

第7回議事録

令和2年1月29日（水）14時00分～

東京文化会館 中会議室2

【吉本副座長】 それでは、第7回の東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会を始めたいと思います。

委員の皆さんにおかれましては、本日はお忙しいところ、ご出席いただき、どうもありがとうございます。きょうは、堤座長がご欠席ということでございますので、私のほうでかわって進行をさせていただきます。

それでは、まず、事務局から定足数及び会議の公開に関する確認をお願いいたします。

【小野事務局長】 事務局長の小野でございます。

本日、最終回になりますけれども、よろしくをお願いいたします。着座にて、失礼させていただきます。

定足数の確認でございます。「東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会設置要綱」第4条第2項におきまして、懇談会の会議は委員の過半数の出席を要するとなっております。本懇談会の委員数が10名、現在6名ご出席いただいておりますので、懇談会は成立していることをまずご報告させていただきます。

なお、堤座長、後藤委員、澤委員、湯浅委員におかれましては、所用によりご欠席とのご連絡を頂戴してございます。

次に、会議の公開についての確認でございます。本懇談会は、設置要綱第6条によりまして、公開で行うものとされておりまして、資料及び議事概要につきましても原則公開となっておりますが、懇談会の決定により、非公開とすることができることとなっております。

報告書の案、こちらは作成過程の資料でございまして、また、もう一つ、オーケストラの練習環境についての資料もお配りしてございますが、こちらは、各オーケストラに対して、公開を前提とせずにアンケート調査を行ったものでありますため、報告書（案）、それからオーケストラの練習環境に関する資料、こちらは非公開、その他会議自体は公開ということでさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(異議なし)

【小野事務局長】 ありがとうございます。

それでは、資料の取り扱いはそのようにさせていただきました上で、本日の会議は公開とさせていただきます。

なお、傍聴の皆様におかれましては、お配りいたしました懇談会の傍聴に当たっての注意事項のとおり、ご協力をお願いいたします。

以上でございます。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

それでは、議事に入る前に配付資料について、事務局から確認をお願いします。

【小野事務局長】 本日、お手元にお配りしています資料でございます。

まず、「世界をリードするオーケストラたれ！」という表題がございまして、東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会の報告書（案）、この冊子と、それから、先ほど申し上げましたが、オーケストラの練習環境につきましてということで、アンケートの調査資料、A4の2枚ですね、こちらを配付させていただいております。

お手元の資料をご確認いただければと思います。不足等ございましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

また、基礎資料集、こちらのファイルの中には、前回の第6回の懇談会の議事録を追加してございます。

資料の確認は以上でございます。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

それでは、早速議事に入りたいと思います。お手元の議事次第に従いまして、懇談会の報告書の案について、ご説明をさせていただきます。説明しながら進行するというのは、なかなか厄介なんですけど、まずは、ここから説明者に徹してご説明いたしますので、よろしくをお願いします。

前回は、素案という形でお示ししてご議論いただいたわけですが、そのときに、さまざまいただいたご意見に基づいて、きょうはその素案をバージョンアップして、ブラッシュアップしたものとして、案としてお手元にお配りいただいております。全部説明すると時間もかかりますので、前回と比べて、どこを修正したのかというポイントを順次ご説明したいと思います。

まず、表紙なんですけども、前回の案では、「東京都交響楽団将来像に関する有識者懇

談会報告書（素案）都響のさらなる躍進に向けて」というふうになっていたんですが、報告書ではあるんですけど、もうその長ったらしいのを取って、一番下に懇談会の名前が出ますので、メッセージだけのほうがいいだろうということで、それを取りました。

それで、前回は、「都響のさらなる躍進に向けて」ということだったんですが、もっと強いメッセージのほうがいいだろうというようなことを前回の議論をして感じましたので、ここでは、「世界をリードするオーケストラたれ！」という感嘆符までつけてのタイトルにしてみました。

実は、これは、ほかにもいろいろ案があって、きょう、複数案をお示しして議論いただくかと思ったんですけど、余りたくさん出してもどうかなと思って、こういう案でしております。ほかには、例えば「世界有数のオーケストラを目指して」とか、幾つかあったんですが、この案ではどうでしょうかということで。これは、ぜひ報告書の顔になる部分ですので、ほかにもいい案があれば、ぜひぜひお伺いしたいところです。

目次を見ていただきますと、提言というのが最初にありまして、以下1から6まであります。前回では、この1から6までをそれぞれ提言の1、提言の2、提言の3というふうにしておったんですが、なかなかフォーカスが見えないというようなご議論をたくさんいただきましたので、提言を一つに絞り込んで、この6つの項目は、提案というような位置づけに変更をしております。

そして、次、1ページ目になりますけども、前回の案では、最初に、「はじめに」という文章がありまして、それで、堤座長のお名前で、こういう懇談会を開催してきて云々かくかくと、よくありがちな前文をつけていたんですが、それよりも、いきなりもう提案を入れたほうがいいだろうということで、そういう形式にしたということが1点目です。

それから、一番下は、もう委員会の委員のメンバーの皆さんのお名前全部をここに書いて、全員の議論によって、まとめたものだということをわかるようにいたしました。

1枚目のこの文章を読んでいただくと、そこで、もう懇談会の言いたいことがここに集約できるように、1枚にまとめてみるということをいたしております。ここだけ、ちょっと読ませてもらいます。

東京都交響楽団は昭和39年の東京オリンピック記念文化事業として、翌40年に東京都によって設立された。以来、定期演奏会を中心とした幅広い演奏活動に加え、小中学校への音楽鑑賞教室、青少年への音楽普及プログラム、多摩・島しょ地域での訪問演奏、福祉施設の出張公演など、多彩な活動を展開し、欧米やアジアでの公演を成功させてきた。

平成27年4月に大野和士氏が音楽監督に就任してからは、より一層、意欲的なプログラムに取り組んでいる。しかしながら、その実績や実力を比較して、未だ十分なプレゼンスを獲得しているとは言えず、世界有数のオーケストラとなるためには、さらなる飛躍を遂げる必要がある。

このあたりは、前回、まず課題を書いてから提案をしたほうが良いということでしたので、非常に短くですけども、そういうふうに課題は整理をいたしました。

懇談会の中では、幅広い視点から都響の可能性やあるべき姿を議論し、6つの提案をとりまとめた。中でも、都響が首都東京を代表する芸術団体としての地位を確立し、国際的な舞台でオーケストラを牽引する存在となるため、次の3つを最重要課題として提言したい。

- 1、これまでの実績と強みを活かした都響ブランドの確立。
- 2、海外公演の定期化を視野に入れたさらなる国際的活動の推進。
- 3、本拠地ホールを含めた運営基盤の確立。

オーケストラを取り巻く環境は国内外ともに厳しさを増している。オーケストラの社会的な役割を明確にし、存在価値を高め、積極的な活動を通してオーケストラ音楽の振興と普及に取り組むこと。それは国際的な課題であり、都響もそのことに自覚と責任を持ち、リーダーシップを発揮、ここ、取り組みが重なりますので、発揮しなければならないというふうに変えたいと思っています。失礼しました。

設立以来積み重ねてきた経験と実績に誇りと自信を持ち、音楽監督、楽員、楽団事務局、そして設立母体である東京都が一体となって、世界をリードするオーケストラとなり、今以上に都民に愛され、誇りに思えるオーケストラとなること。それが、我々懇談会ばかりか他ならぬ都民の願いである。ということで、また書いてみました。

ご意見は、後で全部まとめて伺いますので。

次のページに行ってくださいまして、ここは、以前提言1となっていた部分でございまして、このキーワードは、変更はたしかしていなかったと思います。

四角の中の文言ですね。それから、懇談会での主な意見というのは、若干手を加えさせていただいた部分がございます。

懇談会での主な意見は、前回は、それぞれの項目に対して、どういう意味でしょうね、反対とは言わないんですけど、逆の意見もあったわけで、それを併記をしておったんですけども、これだけの議論で忠実にするという意味で。ですけど、それがあると焦点がぼけ

るということで、それを全て取っております。

それから、前回は、この1番というのは、演奏会のことについてなんですけども、都響の演奏会活動の現状というのを最後につけていたんですけども、それも、ほかの資料を見ればわかるだろうということで、それも取りました。

ですので、この提言をホームページ等で発表するときは、例えば、今年度の最新プログラムとか、昨年度の実績報告書等にリンクを張って、そちらを参照できるようにしてはどうかというふうに思っています。

懇談会での主な意見というのは、何というんでしょう、発言に忠実ということは、もちろんあるんですけども、何というのかな、発言の趣旨が変わらない範囲で、よりわかりやすい文言になるように、少し手を加えさせていただきました。

実は、この部分については、堤座長からもいろいろ細かく見ていただきまして。

【近藤理事長】　　そうですか。

【吉本副座長】　　ええ。さらに赤が入ったものが来ておりますので、それを踏まえて、最終的に固めていきたいというふうに思っております。

それから2番目が、あらゆる市民、コミュニティとつながるということで、これは、アウトリーチ系の話をまとめたところですね。四角の中は、若干文言修正をしたことと懇談会の発言についても、若干手を入れている部分がございます。

それから3番目が、次代の担い手を育てる。修正点は、先ほど来と同じ部分ですけども。4番目は、IT技術の活用と顔の見える都響に向けて。5番目が、都響ブランドとビジョン・戦略を明確に。そして6番目が、財政基盤と演奏環境を整えるということになります。

それで、この演奏環境を整えるというところで、前回も議論になったんですが、いわゆる本拠地ホールのことですね。それを提案の中に入れておりますし、冒頭のところでもそれを3つの提言の一つに含めておりますので。

じゃあ、実際のところ、ほかのオケの状況はどうなのだろうということで、事務局にお調べお願いしてつくっていただいたものが、オーケストラの練習環境についてという資料でございます。

これを一々説明する必要はないように思いますが、ざっと見たところ、一番恵まれているのは、新日本フィルハーモニー交響楽団ですかね。特にホール舞台上でのリハーサルというのが、新日フィルは、すみだトリフォニーホールのフランチャイズで、年30公演以上。

【池田委員】 これ、東響が抜けていますね、東京交響楽団も同じくらいでしょう。

【吉本副座長】 そうですかね。

【池田委員】 ミューザ川崎シンフォニーホールが一応フランチャイズだからね。

【吉本副座長】 ああ。これは、東響は入っていないんですね。

【小川GM】 すみません。12のオーケストラにアンケートをお送りして、回答があったところが8団体ということで、この8団体についてだけ、資料としてまとめさせていただきました。

【吉本副座長】 だから、東響も、この日本フィルハーモニー交響楽団と同じぐらいの恵まれた環境にあるということですね。それと比較すると、都響は、やはりどうなのかというのがあるということでございます。この事実に基づいた提案になっているというところを確認いただきたくて、この調査資料をきょう配付をいただきました。

ですので、ただ本拠地ホールといっても、新しく本拠地ホールをつくるというようなことではなくて、例えば、そうですね、これ、四角の枠の中でいいますと、ここは前回と余り変わっていないと思うんですが、「また」以下の部分ですね。「また、練習・リハーサルを含めて演奏環境について、都立文化施設の運用見直しを含め、実質的な本拠地ホールの実現を図りたい」というような書き方にさせていただいたことと、懇談会の意見からということで、下から2つ目の部分ですかね。東京都の文化政策における都響の位置づけや役割を視野に入れ、まずは、都立文化施設である東京文化会館、東京芸術劇場での音楽監督の指揮する定期公演だけでも、本番と同じ環境でのリハーサルを実現したいというようなことで、ここはまとめております。

最後に、委員名簿と開催概要というのがあるんですけども、委員名簿の上に、前回は、「はじめに」でついていた部分をつけております。

ですから、ここで初めて懇談会は近藤理事長の委嘱を受けて設置されて、かくかくしかじかの議論を行ってきましたという、懇談会の位置づけが何だかわかんないといけないと思いましたので、必要最低限のことを一番最後に入れる形にしております。

一応、説明は以上でございます。まず、大きな構成についてのご意見、あるいは具体的な文言ですね。特にこの頭の表紙のこういうメッセージの部分と、それから、報告書のページで言いますと、1ページ目ですね。もちろん、そのほかの部分でも結構なんですけども、ご意見を頂戴できればと思います。どうぞよろしくお願いします。

【池田委員】 りそな銀行の新しい頭取、平成入行組がメガバンクで初めてだから、昭和

はうんと遠くなったので、昭和39年といっても、僕たち、子供のころ、文久何年と言われても、西暦で答えられなかったから、やっぱり、昭和は全部、括弧に西暦を入れたほうが、より多くの人にピンとくると思うのが一つ。

【吉本副座長】 はい。

【池田委員】 はい。それから、もう1カ所気になりましたのは、こういう言葉狩り、あんまり、私も元新聞記者ですから好きではないんですが、4ページのあらゆる市民、コミュニティとつながるの四角囲いの中の障害者の害は、今は平仮名で表記します。

【吉本副座長】 ああ、そうですね。これも、また石辺の碍とかもありますからね。

【近藤理事長】 どちらかに分かれるから平仮名にしているんですよ。

【池田委員】 そう。もう何かあんまりそういう動き自体には、決して賛成じゃないけど、でも、こんなものでつまらない足を引っ張られても困るから。はい。2カ所、気になりました。

【吉本副座長】 ありがとうございます。

【中根委員】 よろしいですか。

【吉本副座長】 はい、お願いします。

【中根委員】 前回の案に比べると、もう非常にすっきりして、構成もよくなっているし、見やすいし、吉本さんのご尽力だと思います。

【吉本副座長】 いえ。

【中根委員】 お礼を申し上げたいと思います。非常にいい報告書になったと思います。

その上で、ちょっと私も細かいことで恐縮なんですけども。まず、最初の提言の「世界をリードするオーケストラたれ！」というところの6行目の「未だ十分なプレゼンスを獲得しているとは言えず」と、言葉の趣味の問題かもしれませんが、十分な評価とか、認知度とか、そういう意味なのかなという気もするんですけど、まあ、ここは、そんなにこだわるものではないです。

【吉本副座長】 え、評価もしくは何とおっしゃいました。

【中根委員】 認知度。

【吉本副座長】 ああ、認知度ね。はい。

【近藤理事長】 国内での評価のことか、国際的な評価かという点も、ここははっきり書いた方がいいのではないか。

【吉本副座長】 そうですね。

【近藤理事長】 意図は国内ですか。

【吉本副座長】 いや、国内、国内外は、ここでは区別はしているつもりはないんですけど、とにかく実績と実力はすごくあると。あるんだけど、それが正当に評価されていないというようなニュアンスなんですけどね。ええ。

【中根委員】 プレゼンスというと、もうちょっと何か客観的な。

【吉本副座長】 ええ。ここは、何かブランドという言葉もあったんですけど、ブランドを明確にというのがありますので。ただブランドというの、何かちょっとこうコマースリズムみたいなものがあるので。

【住吉委員】 存在感。

【吉本副座長】 存在感。ああ、そうですね。

【住吉委員】 直訳で。

【中根委員】 いいですね。

【池田委員】 じゃあ、もう国内でも、結局、東京「都」がついちゃっているから、東京都民のオーケストラというイメージで、例えば北海道に住んでいる人とか、東北に住んでいる人で、大阪はね、時々定期的に来演しているけど、九州とか、ほかの日フィルみたいに、一時組合運動として全国を回っていたとか、そういうところに比べると、実は、国内でも局地的認知度なんですよね、東京都内では屈指の高い評価でもね。それで、海外に行ったら、今度は一体に、東京には東京という名前がついたオーケストラは幾つあるんだとよく聞かれるから、俊別されていないんですよ。東京交響楽団、東京都交響楽団と東京フィルハーモニー交響楽団と東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団と東京ニューシティ管弦楽団とありますから。

だから、そういう意味じゃ、中根先生のおっしゃることをよりきちっとあれすると、その実績や実力と比較して、国内外において、いまだ十分な認知度を獲得しているとは言えずなんです。

【中根委員】 そうですね。のようですね。

【吉本副座長】 確かに、国内外と入ったほうが、より具体的かもしれないですね。

【池田委員】 そう。東京都内でだけ、とても高く評価されている。

【吉本副座長】 なるほど。

【中根委員】 次に、提案のところで、1ポツ、1番目の都響ならではの演奏を極め、ひろげるの四角の中にある、これも、ちょっと趣味の問題かもしれませんが、2行目の

ところに、「拡充に尽力されたい」というのが、何となく上から目線というような気がする
るので。

下は、チャレンジを望みたいという、こういう書きぶりにして、例えば拡充に期待した
いとか、そういうほうが、何となく。

【吉本副座長】 なるほどね。そうですね。いや、この文末の言い方も、いろいろ、私も
悩んだところなんですね。望みたい、尽力されたいという、ちょっと相手方に委ねるよう
な言い方と、あと懇談会が何とかしたいというぐらいの強く書いているのと両方あるんで
すけど、確かに、尽力されたいというのは、何かちょっとよそよそしいとすれば、ここは。
かなりさっぱりかもしれないですね。

【中根委員】 同じ視点から、だから2番目の最初の括弧の中にも、可能性も模索されたい
というのも、例えば、模索してはどうかというふうな形にしたほうが。

【吉本副座長】 ああ、なるほどね。はい。

【中根委員】 より、いいのかなというふうに思います。

それから、すみません。あとは、これは、1番目の提案のところの③の演奏会の開催地
域拡大というところで、最後のところ、「都響の皆さんからすると、もう少し回数は増や
してほしい」というのは、ちょっと何か日本語として、「都響の皆さんには、もう少し回
数を増やしてほしい」という、そういう……。

【吉本副座長】 そうですね。はい。これ、多分発言の言葉がそのまま残っちゃってしま
した、ここ。

【池田委員】 どっちが望んでいるんだか、全然わからない。確かに。

【片山委員】 やっぱり、今の日本語のことでいうと、3番以降もそうですよね。取り組
みたいという、都響は、もう都響が主語になっているような印象を。取り組まれたいと
か、図られたいとか。

【池田委員】 取り組んでいただきたいとか。

【片山委員】 うん。そういう表現じゃ。5番、6番もそうですよね。図りたいになっ
ていますけど。こちらが提言としているのだったら、図られたいとか、図っていただきた
いとか、そういう表現じゃないと、都響が、何か国塩さんが図りたいみたいな感じがして
しまうので。

【吉本副座長】 そうですね。

【片山委員】 ちょっとこの日本語を少し考えていただいたほうがいいかなと、ちょっと

今、関連して思いました。

【吉本副座長】 そうですね。確かに、そうなんですけど、そうすると、みんな取り組んでいただきたいとか、何かそうなっちゃうので。例えば……。

【片山委員】 望むとか、そういう日本語として、バラエティをつければ。

【吉本副座長】 望む……。

【中根委員】 そもそも……。

【片山委員】 先ほど、望みたいというのは、1番で上がりましたけど。

【池田委員】 あと、細かいことなんですけど、5ページの被災地支援と公共機関が④、④になっているので、下は⑤だろうと。

【吉本副座長】 ああ、失礼しました。いろいろありますね。

【池田委員】 いろいろ、まだまだ、でも、随分すっきりして、意思是伝わると思います。

【中根委員】 あとすみません。3ページの黒いポツがあるから、1、2、3、いきなり周年行事と出てくるんですけど、これは一般の方にすぐわかるあれですかね。国交樹立何周年とかといった周年なのか。

【吉本副座長】 創立何周年とか、都政……。

【中根委員】 とか、入れたほうが、いきなり周年行事って、何だろうと。

【吉本副座長】 はい。

【池田委員】 業界用語。

【中根委員】 そうですね。

【片山委員】 これは、広く一般の方に読んでいただくという趣旨のものですか。

【吉本副座長】 そうですね。公開されますからね、はい。

【片山委員】 やっぱり、そうですね、それは。例えば何とかで、都政何周年なのも、何か、ちょっとそうすると誰でもわかりやすいですね。

【中根委員】 そうですね。

あと、すみません。5ページの一番上の障害者のためのバリアフリーの充実という、ここは、専らチケットの話がされているんですけども、一般にバリアフリーというと、何か施設のハード面でのあれというのをイメージがあるので、そういうものに加えてというような形に。

【吉本副座長】 そうですよ。ソフトのバリアフリーのことしか、ここにはないので、そのバリアフリーというのは、やっぱりハードのイメージがあるからということですね、

はい。

【中根委員】　そうですね、うん。

【池田委員】　チケットの入手もそうですし、何なんだろうな、やっぱりヨーロッパなんかは古い演奏会場が多いから、日本に比べても、スロープとか車椅子席とか決して進んでいないんだけど、逆に一般聴衆の市民の方とか、オーケストラの事務局の方とか、ホールの方がさっと手と差し伸べて、その位置まで非常に手早く、素早くみんなの協力で、そういう方を誘導するようになって。

だから、マンパワーとしてのバリアフリーは意識の問題で、スロープをつけるというのはハードの問題で、いろいろなものがこの数行には本当は入っているので、奥が深いと思うんですよ。こんな簡単にチケットが買えるか買わないかじゃなくてね。

【吉本副座長】　ここは、チケットのことしか書いていないので、もう少し運営全般を含めたソフト面からもバリアフリーを強調するとかと。

【池田委員】　そうですね。

【片山委員】　ほかのところではバリアフリーというのは、そうか、もうここだけ出ている。

【池田委員】　ここだけちゃんと出ているの。

【片山委員】　ああ、そうですか。

【池田委員】　それにしても、このチケットオンラインの話だけじゃ、ちょっと、その辺。

【片山委員】　そうですね。会場ですよ。

【吉本副座長】　前提が、まず懇談会に出ていた意見をここでまとめているということなんですよ。で、これが本文ではないということなんですよ。

本文は、あくまで四角の枠の中で、四角の枠の中が提案として、まとまったことの背景の意見がこうあるということです。ただ……。

【池田委員】　こういうふうに出されたときに、ちょっとここだけ寂しい感じがする。

【吉本副座長】　それしかないのかとなる。

【片山委員】　それは……。

【吉本副座長】　なので、きょう意見を言っていただいたら、それはそれでということですね。

【片山委員】　足そうとするのは……。

【吉本副座長】　ええ。要するに、きょう意見をいただきましたので、このバリアフリーのと

ころは、もう少し語彙を足して、幅広く書くようにしたいと。

【池田委員】 ちょっと、ここを膨らませましょう。

【石田委員】 6項目ある中で、明らかに言及が少ない項目があると思うんですが。3番です。

【池田委員】 人材育成ですね。

【石田委員】 ここに関して、もっと意見、私たち言ったほうがいいと思いませんか、いや、バランスってあると思うんですよね。これだけ項目立てをきちんとしている中で、3がこんなに少ないのは、私たちの見識不足だと。

【池田委員】 そうだね。これ、半分……。

【石田委員】 まず、四角囲みの中の意味が、ちょっと私はわかりません。これは、主語は誰なんでしょう。1番目はいいんですよ。2番目の演奏会云々で、都内の云々、誰が取り組みたいんでしょうか。

【吉本副座長】 それは都響ですね。

【石田委員】 都響は取り組みたいんですか。

【吉本副座長】 だから、これも、さっきの議論のところで、取り組みを望みたいというふうにするということですね。

【石田委員】 いや、取り組みたいと書いちゃっていいんでしょうか、都響は。私たちが、そういうふうにしたというふうに……。

【池田委員】 そうね。取り組みたいというと、これから何か始めちゃう感じですね。

【石田委員】 取り組むんだって。

【片山委員】 あくまでも、有識者懇談会の書類ですからね、これね。

【吉本副座長】 だから、先ほどの議論だと、ここは取り組みを望むとか、そういう……。

【石田委員】 じゃないと。

【池田委員】 アカデミーの開設なども検討していただきたいとか、望むとか。

【吉本副座長】 などの取り組みも望むとか。

【石田委員】 ですよ。じゃないと、私たちが言っているんだったら、本当は取り組んでいただきたいということなんだと思うんです。それなら理解できます。それと、やっぱり圧倒的に少ない。

演奏家を育てる、作曲家を育てるということが次代の担い手であるというふう感じたんですけども、果たして、本当にそれだけでステークホルダーの分析はいいんでしょうか。

オーケストラにとってのステークホルダーには、他にもいるのだということも観点として、加えてはどうか。そうするとちょっと膨らむかなと思ったんですね。

若手アーティストの育成というのが、①だけじゃなくて、演奏家や指揮者というのが、それに当てはまると思うんですけども、作曲家もそこに入るのかな。

②、③以降、何か考えてほしい。

【池田委員】 ②としては、やっぱり仙台フィルハーモニー管弦楽団がホールに割と張りついていて、そこで、子供とか、アマチュアの指導もしている。だから、あそこに行けば、仙台フィルの人が何かオーケストラのことを教えてくれる、手ほどきしてくれるとアドレスがついているんですよ。だから、東京文化会館に行けば、都響の人が何かという……。

【石田委員】 やってくれる。

【池田委員】 アマオケは、ここの地下のそれこそ都響が使わないときの練習場。結構、アマチュアも、この東京文化会館は練習に利用しているので、そういう何かこう学生とか、アマチュアの人たちとの接点づくりというのかな。

【片山委員】 きっと、2番と少し重なっている。

【石田委員】 2番に、おっしゃるとおり、そういう項目が結構ありますね。藝大のことも書いてあって、藝大の学生さん、もちろん、次代の担い手であるので間違いないので、そういう教育との関係ということであれば、こちらに何かちょっと違った形で言及をしていくという方法もあるかもしれません。

【池田委員】 2を少し。

【片山委員】 2は多い。

【池田委員】 ダイエットして、3にひっつけるという手術も。

【片山委員】 ちょっとプロ、音楽家、アーティスト絡みのことというのは、ちょっと、2で、そういうニュアンスがあるものがあれば、3に持ってきてしまうとか。

【石田委員】 教育的な側面を膨らませて、②、③をつくっていくというのはあるかも。

②が、もし学生とか、アマチュアの愛好家ということであれば、あともう一つは、やっぱり聴衆だと思うんですよ。聞く人というのをどういうふうに育てるのという視点が、どこかに入っていれば。

【吉本副座長】 聴衆育成の話は入っていないですね、ご意見にはなかったのです。

【石田委員】 入っていない。

【吉本副座長】 ええ。

【片山委員】 もうご意見はなかったということですね。

【石田委員】 なかったのですね。

【池田委員】 なかった。

【片山委員】 そうなんです。わかっていなかったのかも。

やっぱり作曲家の話、指揮者の話、あとオケのメンバーになるような演奏家の話、聴衆の話。こういうのは、それぞれ積極的に育成していくというような視点が、今だと、一括して、若手アーティストの育成になっているから。少し分けて細かく、急に、こんな段階でそんなことを言っていたら大変なんですけど。ちょっとおっしゃるとおり……。

【池田委員】 バランスとして、全体、これを並べてみてわかったことでしょうか、それ。例えば、僕、今、NHK交響楽団と読売日本交響楽団で、ゲネプロに、一般の人を三、四十人、四、五十人か、集めて、まずゲネプロの間、私が歌舞伎みたいにイヤホンガイドでずっと喋っているんですね。参加者は……。

【石田委員】 いろんなことをしていますね。

【池田委員】 それで、その後1時間レクチャーして、本番までつき合わなきゃいけない、本番終わった後も。

それで、本番の後のバックステージツアーなんかもね。一つはNHKのカルチャーセンターの、NHK文化センター青山とN響のあれで、もう一つは、ヤマハと読響の提携で、ヤマハのメンバーズが対象です。

楽曲解説は、プログラムに、皆さん、すばらしいのを書いていらっしゃるから、むしろ日本のオーケストラの置かれた現状とか、きょう、こういう演奏会をここでやる意味とか、そんな話を私はするようにしていますけど、ほかのオケでは、そういう取り組みも、今始まっているんですね。

【片山委員】 そういえば、最近聞いた話では、広島交響楽団は、指揮者によるんですけど、練習3回だったら3回、全部オープンにして、来た人は自由に聞いていていいということにしているというので、ちょっと驚いたんですけど。

【池田委員】 まあ、下野さんだったらやりかねない。

【片山委員】 そうそう。下野さん、それをやっているんだそうですね。

【片山委員】 そうそう、そうですね。

【片山委員】 聴衆育成の話としては、本当、練習も見れるというのは、すごく、指揮者は、こういうことをやって、オーケストラはこういうふうやっぱり練習でやっているん

だとか、もう聞き方、全然変わりますからね、本番も。すごく聴衆が進歩するという点では。だから、そういうことをちょっと3番に。2番になると、多分、ちょっと細かくするというのはいいと思います。

【池田委員】 うん。昔は、何か武士道なのか、本番で全てを語れとか、練習を見せるなとか、聴衆の側にも、そんな途中なんか見たくないという意識あったけど、今は、かなり変わってきている。

【石田委員】 4番にありますね。4番の②観客に関する……。

【池田委員】 ファンとの交流。

【石田委員】 顔が見えるという4番のタイトルには、呼応している話なんだけれども。

【池田委員】 むしろ、積極的にもっと。

【石田委員】 いい話ですよ。

【片山委員】 それこそ、上から目線ですけど、やっぱり聴衆の鑑賞力を上げるというのかな。そういうためには、いろんなやり方があると思うんですよ。

【池田委員】 やっぱり、前から何度か前から発言したけど、これだけ多くのオーケストラがしのぎ削って、それぞれ、すばらしいプログラムだと、一つのオケに、なかなかつかないですよ。1回券、昔ほど定期券と1回券の価格の差がなくなっちゃったのも、そこに起因している。ユーザーニーズが1回券志向になって。だから、それで、なおかつ継続的に都響を聴いていただくということには、相当なついていただく仕掛けが必要で、それが、都響のお客さんは、やっぱり積極的ないいお客さんだというふうになるには、そういう仕掛けをもうちょっとというところで、この3番の中に、聴衆教育というのを入れても。

【石田委員】 大事ですよ。

【吉本副座長】 ここ、文言どうしますか。聴衆の育成、聴衆教育、聴衆のレベルアップ。何かどういう言葉を使っても、ここって、結構上から目線になるんですけど。

【池田委員】 聴衆の活性……。聴衆の能動化、活性化。

【片山委員】 覚醒……。

【池田委員】 活性化。

【片山委員】 活性化か。

【池田委員】 能動化。

【吉本副座長】 あるいは、聴衆とともに育つみたいな言い方だと。

【池田委員】 そうですね。

【片山委員】 そういう言い方がいいですね。

【石田委員】 やわらかくていいですね。

【池田委員】 やわらかくていい。

【片山委員】 聴衆のクオリティーを上げるとかだと。

【石田委員】 聴く力の獲得ですとか。

【池田委員】 いや、でも、何か都響のお客さんは怖いという人が何人かいるというのは、どうなんですか。

【片山委員】 怖い。

【池田委員】 うん。ほかのオケよりも何か……。

【吉本副座長】 厳しいということですか。

【池田委員】 ほかのお客に対して厳しいという。客同士の諍いが何か。

【片山委員】 うるさいとか。

【池田委員】 この間、都響の客は、ちょっとスノッブ度が高くて、会員じゃない、何か一見で、若造なんかをばかにする風潮があるとかなんか。この間なんか、こんこんとある人に言われて、一度も自分は感じたことないので、そうかなと思ったんだけど。

【片山委員】 そういうお客様は、いろんなオケにもいらっしゃると思いますけど。

【池田委員】 N響は怖いですよ。

【吉本副座長】 今の項目に関してなんですけど、今は都響さんは公開リハーサルとか、オープンリハーサルみたいなことはやっていらっしゃるんですけど。

【国塩芸術主幹】 時々やっています。毎回ではないですけどね。

【吉本副座長】 時々やっていらっしゃいます。

【国塩芸術主幹】 サポーターという寄附をしている方を対象にやっている場合もあるし、それから若い人を招いてやっている場合もあるし、それから、そういうこと関係なく、例えば文化会館でたまにリハーサルができる時に、いい機会だから……。

【吉本副座長】 公開しようとか。

【国塩芸術主幹】 チケットセールスの宣伝も兼ねて、リハを公開しようということもあります。

【吉本副座長】 なるほど、はい。

【片山委員】 時間を切ったりしてやったこともありましたね。

【国塩芸術主幹】　ただ、いつでも誰でも来てくださいというような形はとれませんが、ある程度、機会を選んで、年に10回近くはやっていますよね。

【池田委員】　前よりふえたですよ。

【中根委員】　そうですね。多くなりましたね。

【吉本副座長】　はい。じゃあ、この次代の担い手を育てるところは、若手アーティストのほかに、もっと若い、アマチュアとか、子供たちを育てるといったようなことと、それから、聴衆とこれを育つ。聴衆の育成。もうちょっと文言は、あんまり上から目線にならないような言葉で加えてということですね。

【石田委員】　そうですね。

【吉本副座長】　はい。

【住吉委員】　すみません。今の話だと、聴衆のところと顔の見えるというのが、若干、ちょっとこう、何かどっちがどっちなのかみたいになるので、今の点々で見ると、広報活動の充実・強化の点々の中の一般市民をどうやってひきつけるか、鑑賞教室的なものからというのは、この3のほうに移動したほうが。

【池田委員】　3のほうに、ああ、そうですね。

【住吉委員】　さらに、自分のことなので、細かくて申しわけないんですが、その下のラジオ番組と都響でコラボしてというのがあったという、何か、ただ、事実を述べている形なんですけど。などもあったが、都響に親しみを抱いていくのに効果的だったみたいくない、ちょっとつけていただいて、それも、もしかしたら、聴衆育成のほうに入れてもいいかもと感じました。

【片山委員】　それはいいですね。

【池田委員】　そのほうがいいですよ。

【住吉委員】　あと、この4番の全体のタイトルが、何か中身とちょっとずれを感じて、なぜならIT技術というものがすごい強いので、IT技術の活用というと、何かプロジェクトマッピングとかをしながら演奏会かなみたいな感じだったんですけど、あ、何だ、SNSやるだけかみたいな。ちょっと、IT技術というと大げさに……。

【池田委員】　下を見るとしょぼいんですよ。何か四角の中に比べて。

【住吉委員】　なので、四角もそうなんですけど、SNS活用の強化、多言語化、今度はウェブサイトの充実など、広報活動を強化すべきで。あえてIT技術という言葉何か使わないほうが、私たちの真意が伝わるかなと。

なので、上の大きなタイトルも、もしかしたら顔の見える都響に向けてだけでもいいのかなという気がします。

【片山委員】 そうですね。

【吉本副座長】 でも、ITを使って、何だっけな、懇談会でも意見あったと思いますけど、フィルハーモニア管弦楽団が映像で、その場で自分が指揮できるような、何かVR使って、何かやることあるじゃないですか。

【池田委員】 都響も、この間、何だっけ。

【石田委員】 ありましたよね。

【池田委員】 サラダの後に売れたんですよ、VRで。

【吉本副座長】 そうですか。

【池田委員】 大野さんとちゃんと矢部さんがぺこんと頭を下げて、こんなことができた。だから、あれ、フィルハーモニアだと騒がれて、都響じゃ騒がれないのは、ちょっとアンフェアだなとか思って。

多少の技術の違いはあるにしても、既にやっているんですね。だから……

【吉本副座長】 あれなんでしょう。あれ、日フィルだと思いましたが、耳の聴こえない聴衆に向けて、こう何か。

【池田委員】 落合陽一さんと組んでやっている。

【吉本副座長】 場が振動するようなものとか、何かそういうのが、やっぱり技術のことはあるので、タイトルは、確かに、IT技術と言っちゃうと、途端にそれが強くなっちゃうんですけど。何か中には入っていてもいいんじゃないかなと思うんですけどね。

【池田委員】 この間、国立音楽大学と渋谷慶一郎さん、東大のロボットのチームが、やっぱりアンドロイドでオーケストラをどこまで指揮できるかという記者会見をやって、この夏には、新国立劇場でも、そのオペラが、島田雅彦の台本である。

【片山委員】 そうなんですか。

【池田委員】 大野和士、それこそ大野和士がやるんだけど。だから、やっぱり、それがいいか悪いかというと、大友直人さんみたいに絶対嫌だという人もいるけど、やっぱり、新しいそういうものが出てきて、何か音楽との接点があって広がるという。

ここに興味を持つ人がいるのであれば、やってみない手はないぐらいのバランスだとは思うんですけど。

【片山委員】 今みたいなお話、いろいろ、もう幾つか出ちゃいましたけど、そういう項

目は、やっぱりちゃんと入っているように、少しふえれば、IT技術が上にあってもいいかなと思いますね。

【吉本副座長】 そうですね。だから、発言のところに、今の発言を入れるということだ
と思うんですけど。

【片山委員】 僕の新しい発言が……。土壇場で……。

【池田委員】 いや、今、違う。足りないのをパッチワークしているだけ。

【吉本副座長】 大変なことになる。

【石田委員】 5番の都響ブランドですね、ビジョン・戦略を明確に。

1番の④はここに書くべきことなのでしょうか。海外公演とか、海外交流か、国際交流。
要するに、さっき前文のところで、ちょっと話題になったプレゼンスという、世界的なプ
レゼンス、リーダーシップというものを都響はとるためにはというのが、この大きなス
トーリーだと思います。

それが1番ではなくて、やっぱり、この5番に向けてベクトルが集約していくというこ
とが重要なのかなと思うんですね。

例えば、4番の中で、やっぱり、私が強調したいのはアジアですよ。アジアの中での
都響のそれこそプレゼンスということが、これからの都響のブランドビジョンにどうつな
がっていくのかということが、表現できると、とても、はっきりとしたストーリーになっ
ていく。もちろん、それが欧米諸国であろうと、アフリカであろうと、いろんなところ
に向けて、世界の各国に向けた都響の革新ということが、5番にちょっといろんな国のこ
とも言及しながら書かれていくということがあったら、私はいいいのかなと思っています。

1番は、演奏の要するにクオリティー、水準ですよ。その水準ということに徹してい
ただいて、今みたいな話というのは、例えば5番に向けて書かれていくというふうに考え
るかなと、私だったら思っていたんですけども。

【片山委員】 それに関連質問というか、そうだなとは思っていたけど、これは、もうこ
の話が5番に来ているというのは、何か意味があるんですか。

【吉本副座長】 それは、前回も、実は議論がありまして。

【片山委員】 すみません。欠席が続いています。

【吉本副座長】 これはそうです、さっき修正点のときにご説明しなかったんですけど、
例えば1番は、演奏会活動について。それから2番がアウトリーチ教育、普及活動につい
て。3番が人材育成について。というように、前は、そういうタイトルがついていたんで

すよ。だけど、何か1番の中で、また1番があるみたいになっちゃったので、シンプルにするという、取ったんですね。その後、ちょっと、きょうまで思っていたのが、懇談会での主な意見というところに、1番は、演奏会に関する懇談会での主な意見、2番は教育普及、アウトリーチに関する懇談会での主な意見と、そこに一般名詞を入れたほうがいいかなということを感じていました。

それで、順番は、確かに、何でしょう。結局、これは読み手に向けて、誰を一番の読み手にするかというところが、多分あると思うんですね。だから、より行政の政策文書みたいなことになる、この5番が最初になるとすごく変だと思うんです。だけど、やっぱり都響は、演奏活動が何といても中心だよねというのを出したほうがいいのかなと、私は、それを思って、今はそれが1番に来ているということなんですね。

いや、そこをきょうご議論いただいて、3つの提言のうちの1番というのが、この今提案の5番につながっていますから、だから、5番を前に出すというのも、もちろんあると思います。ここはちょっとご意見をいただきたいところですね、逆に。

【片山委員】 私なんか、もうすみません。本当に欠席が続いていたのであれなんですけど、5番が、多分前にあったほうが、1と5というのは、かなり内容的な、今後をいろいろ。つまり2、3、4、6というのは、当然、こういう公共的な段階であれば、何か教育的なこととか、市民コミュニティとつながるとか、教育とか、広報とか、財政基盤、演奏環境というのは絶対入るようなことで、1と、1ももちろん演奏のことですから、演奏だったんだから入るんだろうけど、やっぱり5というのは、かなり、まさにブランドビジョン、戦略みたいな話ですから、何か前にやって目立ったほうが印象は。

1と5というのは、連動して目立つように読めるほうが、僭越ながら、ちょっといいかなと思いました。

【池田委員】 片山さんの場合、どっちが先だといいと思いますか。5、1ですか、1、5ですか。

【片山委員】 まあ、だから書き方なんですけど、どっちでも、どっちでもいいというところ怒られちゃいますか。「世界をリードするオーケストラたれ！」というのが、ばんと来ているわけだから、そうすると、戦略・ビジョンのほうが頭にあったほうがスタンダードじゃないでしょうか。

【吉本副座長】 前に出すんなら、これが1番でしょうね。演奏会活動の話があって、ブランドビジョンというのは変。

【片山委員】　　そうですね。

【池田委員】　　逆に、こっちが僕、それを言うんだったら、ど頭に来ても。

【片山委員】　　そうですね。うん。5、1、2、3、4、6か。

　　というのは、例えばなんですけど、いいかなと思いました。はい。おっしゃるとおりであります。

【吉本副座長】　　それで、皆さん、そのほうがいいということであれば、そこは、順番を変えたいと思いますけど、よろしいですか。

【片山委員】　　はい。

【石田委員】　　5、1、2、そうすると、つながりますよね。

【池田委員】　　大上段からばんと入って、だんだん。

【石田委員】　　そうなったときに5番の②がいきなり、それこそ、頭に出てくるというのは、ブランドとか、ビジョン・戦略を明確にというところに、いきなり楽員のモチベーションというところがちょっと気になって。

【池田委員】　　楽員のモチベーションは、この1番のところに。

【石田委員】　　1番、それか6番じゃない。

【池田委員】　　6番。

【石田委員】　　演奏環境。

【片山委員】　　どっちかという後ろのほうが落ちつきはいい話ですよ。

【石田委員】　　わからないですけど……。

【片山委員】　　これが頭にあったりすると、確かに、何かモチベーションの低い楽団だという印象を。何かそういう。

【池田委員】　　そんなことはない。

【片山委員】　　そういう読んじゃう人が出てくるかもしれないから。

【池田委員】　　それは気の毒だからやめて。

【片山委員】　　そんなことはないと思いますよ、私は、もちろん。ええ。

【吉本副座長】　　多分、モチベーションというワーニングが問題なんだと思うんですよ。下に書かれていること、モチベーションとはちょっと違う気がしますね。意識が変わるみたい。あるいは楽員のプライドとか。

【片山委員】　　意識改革みたいな感じですか。それも失礼ですよ。ないかな。

【池田委員】　　楽員の協力ぐらいにしておいたっていいですよ。

【片山委員】 協力。

【池田委員】 うん。楽員の参加意識とか協力とか。

【片山委員】 参加意識。

【近藤理事長】 楽員一人一人がもっと頑張ろう、やろうという気になり、それによって、クオリティーが上がることを目指すということかな。

【吉本副座長】 もちろんね。

【近藤理事長】 そうすると、演奏のレベルを上げることに関心が向き、それが海外公演に積極的になろうということになるだろう。

【吉本副座長】 楽員の意識。意識。

【石田委員】 オーケストラにとっては楽員の方というのが、やっぱり一番の財産ですよ。楽員さんがいて、彼らが一人ひとりブランドをつくっていく。あるいは一人ひとりがブランドであるかこそ、都響というのが、しっかりとしているというのがあるべき姿だし、今の都響だと思うんですよね。すごく素晴らしいソリストが集まっているわけですから。

だから、楽員がそのブランドをつくっていくんだという、そういう、もうちょっと前向きな書き方にならないかしらと思いました。楽員こそがブランドをつくっていく、都響ブランドをつくっていくんだと。もちろん、観客も都響ブランドを磨いていくんだし、それから、周りの教育関係の組織なんかもそうだし、全てのステークホルダーが都響ブランドというのを磨いていく、つくっていく役割を担っている。その中で、一番やっぱり大事なのが楽員さんなので、楽員の……。

【吉本副座長】 楽員のイニシアティブとかどうかですか。

【石田委員】 イニシアティブ。

【吉本副座長】 楽員の主体性とか。

【池田委員】 楽員のやっぱり当事者意識とか、参加……。

【住吉委員】 楽員一人一人がブランド。

【石田委員】 なんですよ。まさに、いや、今住吉委員がおっしゃったことだと思います。

【片山委員】 そうなのがいいと思います。

【池田委員】 例えば、オーボエのアルブレヒト・マイヤーというより、やっぱりベルリンフィルハーモニー管弦楽団の首席オーボエ奏者のアルブレヒト・マイヤーといったときに、アルブレヒト・マイヤーは光るわけね。ほかにオーボエの名手いっぱいいるし。ホル

ンのシュテファン・ドールにしても、シュテファン・ドールというと、えっただけ、ベルリン・フィルの首席のシュテファン・ドールというと、ベルリン・フィルのブランドイメージと彼の実力が合体した形で、さらに、もう一段上のほう、ブランドになるという。

あそこは極端な例だけど、それぞれ単独よりもくっついたほうがブランドイメージが上がるような首席奏者たちが何人もいるわけですよ。

だから、やっぱり楽員と楽団が一体になったブランディングの向上を図れば。

【吉本副座長】 いいじゃないですか。楽員と楽団が一体になったブランディング。

【池田委員】 うん。とかブランドの向上とか、そういう話ですよ。

【石田委員】 うん、やっぱり都響の矢部さんとか。

【吉本副座長】 矢部さん。そうですね。

【片山委員】 昔だったら、やっぱり指揮者とオーケストラで片づいていたわけだけど、今は、やっぱり個々の団員に物すごく注目度が来る時代になっていますから。そこが、やっぱり、ちょっと強調されてポジティブに生きてくるようなのがいいですね。

【石田委員】 うん。そういうふうにしませんか、ここは。

【池田委員】 また、それだけの力のある人をこの楽団はいっぱい持っているから、ちょっと、それを、みたいなのをフィーチャーしたほうがいい。

【石田委員】 うん。だから、この後の3つの文章も、何かちょっとそういう書きぶり。

【吉本副座長】 全体的に、どんなふうに変更すればいいですか。

【石田委員】 えっ、これ。

【吉本副座長】 書きぶりを変えと言われても、何か私に任されてしまっても困るんですけど。具体的に、こう書いてほしいと言っていたかないと。

【石田委員】 矢部さんのお話の中で、いろいろ出てきたんじゃないかなと期待しているんですけど。言葉を前向けにすれば、大丈夫だと思います。

【片山委員】 今のブランドとか、そういう言葉で。

【石田委員】 それで行けるとしますよ。

【吉本副座長】 いただいたのは、さっき池田さんがおっしゃった楽員と楽団が一体どういうブランドの向上というふうにしたところですね。

【池田委員】 そうですね。で、やっぱり、この何というのかな、難しい言い方をすると、やっぱり個と集団の、それぞれ単独、さらに、それが一体になっていて、いろんな形でのブランディングの中で、やっぱり、戦後民主主義的な全員平等というんじゃない、やっぱ

りスタープレイヤーはスタープレイヤーとして、堂々と前面に立てていくみたいな、そういった、よい意味でのスターシステムの導入ということも、うまく言えないけど。

【石田委員】 難しいですね。

【池田委員】 でも、やっぱり何人か楽員にスターが、スターソリストがいると、やっぱり華やかなイメージを振りまけますからね。

【石田委員】 持ち上げ過ぎない。

【池田委員】 持ち上げ過ぎないことかな。ただ、そう……。

楽員の顔が明確に見えた上でのブランディングという、それぐらいの言い方だったら、スターシステムなんて言わないほうがいいですね。

【片山委員】 そうですね。余り、具体的のことは、ちょっと書きにくいかもしれない。

【住吉委員】 書きにくいですね、逆にね。

【片山委員】 じゃあ、都響の首席奏者を必ず定期演奏会に、ソリストにするんですとか、そういう話に。じゃあ、何回以上出ていないと認めないとかいって、何か組合の交渉みたいになっちゃうから。

【池田委員】 そうそう。

【石田委員】 逆に今タイトルにしようとしていることを、一つのぼちに落としちゃって、②と今あるけれども、もうそうじゃなくて、何だっけ、さっき、池田さんが言ったことをタイトルじゃなくて、出しちゃう。

【池田委員】 楽員と楽団が一体になってくるわけだから。

【石田委員】 それを①の中に入れては。

【吉本副座長】 じゃあ、今いろいろいただいた意見を適宜そしゃくして作文をしたいと思います。

【池田委員】 作文してください。

【近藤理事長】 さっき石田さんが言われ、楽員こそ都響の宝だという点を何らかの形で見出しにできればいいですね。

【吉本副座長】 発言として入れればいいんですね。楽員こそ都響の宝であると。

【近藤理事長】 何らかの形で。

【池田委員】 指揮者が一回棒を振っても弾く人がいなかったらね。

【石田委員】 そうですね。

【片山委員】 こんなうまい人たちがいるんだみたいなイメージをお客さんがたくさん持

つようになることが、すごくいいことだとなりますから。

【住吉委員】 そうすると、でも②として残したほうが、やっぱりいいかもしれないです。

【石田委員】 残しましょう。

【池田委員】 その意味で。

【吉本副座長】 ええ、残して、言葉を。少し作文を。

【石田委員】 骨子の中をどうしますかね。

【池田委員】 少し楽員が光るような形で。何かちょっとそこが逆にきちっと売り出すべきポイントでもあるかな。

【吉本副座長】 あとはいかがでしょうか。

表紙のこのキーメッセージは、ほかにいい文言はないですかね。

【近藤理事長】 タイトルですか。

【吉本副座長】 ええ。何かこの報告書について、もう一度考えたんですけど、都響の理事長から我々が委嘱をされて、それで堤座長を初め、我々がまた近藤さんへ返す。それ、だからオーケストラへのメッセージにもなるでしょう。オーケストラへのメッセージということは、さっきの話に重なりますけど、各団員一人一人へのメッセージだったり、それから、音楽監督へのメッセージだったり、あるいは事務局へのメッセージだったり、さらには、東京都へのメッセージというようなことかなと思って、こういう言葉にしてみたんですけど。

【石田委員】 良いと思いますけど。

【吉本副座長】 いいですか。

【池田委員】 あくまで、これは、東京都ではなくて、近藤理事長の私的諮問委員会だから、このぐらいパーソナルなメッセージ性があっても、逆に懇談会との性格とも一致していていいんじゃないですか。

【石田委員】 あと1点だけ、1ページの提言のところに、「東京都交響楽団は」と書いてあって、いきなり都響と書いてあるんですけど、略してよいのでしょうか。

【吉本副座長】 そうですね。

【石田委員】 いきなり略しているんですけど。

【吉本副座長】 何か書きますか、以下都響とするとか。

【石田委員】 いやいや、それも書くか、どうしますか。

【吉本副座長】 それか、全部フルネームで行きます。

- 【池田委員】 じゃあ、東京都交響楽団、以下都響。
- 【石田委員】 はい。
- 【池田委員】 括弧閉じで入れたら、括弧に入れれば。
- 【石田委員】 それでよいのでは。
- 【池田委員】 うん。
- 【吉本副座長】 何か、そうか、（都響）とすればいいんですね。東京都交響楽団の後ろの（都響）として、以下は都響になると。
- 【石田委員】 都響って、小学生が読んでも都響となるのかが、怪しい。
- 【池田委員】 みやこひびきさんとか。
- 【石田委員】 いや、読まないでしょう。
- 【池田委員】 演歌歌手みたい。そういう人いるかもしれない。
- 【片山委員】 何かいいですね。みやこひびきって。
- 【池田委員】 それで、都響のブランドにしますか。みやこひびきで。
- 【片山委員】 みやこひびき、いや、広告、コンサートの何か……。
- 【吉本副座長】 はい。いろいろご意見を頂戴してありがとうございます。
ほかにはいかがでしょうか。
中根さん、何か、もっとこういろいろ、後ろの意見でありそうなところで、途中で、何か議論が行っちゃった気がしますけど。
- 【中根委員】 いえいえ。あの、もう一つだけ、最後に。
- 【吉本副座長】 はい。
- 【中根委員】 インバウンドのところ、③のところ、インバウンド拡大に向けて、いきなり中国語や韓国語と出ているんで。例えば、英語等の主要言語、特に訪日客の多さという観点から中国語や韓国語というふうにしたら。
- 【吉本副座長】 はい、そうですね。
- 【中根委員】 ストレートに中国語、韓国語だけというよりは、やっぱり。
- 【石田委員】 確かに。
- 【吉本副座長】 そうですね。その辺の意見を、ちょっと……。
- 【池田委員】 しかも英語があれば、一応、全方位対応ですかね。
- 【中根委員】 多重……。
- 【吉本副座長】 そうですね。

【中根委員】 ただ、でも、そうは言っても、やっぱり中国人、韓国人の数というのは、圧倒的なので、そういうところは、実際、いろんな標記も、もうそういうふうになっている時代ですから。

【片山委員】 2番目に欧米人にも人気があるといえるのが、何か全然出てくるので、何か中国語や韓国語。

【池田委員】 上野の話ね。これ、前はフランス人だったんですよ。

【片山委員】 そうですか。

【池田委員】 上野や谷中はフランス人に人気があると。

【中根委員】 何ページ

【片山委員】 8ページ。

【池田委員】 8ページの。

【片山委員】 今まさにおっしゃっていた中国語、韓国語の次。

【吉本副座長】 8ページの一番上のぼちですね。フランスだけというのは変だと思って、こういうふうにしたんですけど。

【池田委員】 フランス人、確かに、フランス語もよく聞きますよね、雷門の前あたりで。

【片山委員】 フランス人にしちゃったんですね。そうか。

【吉本副座長】 でも、今度は、フランス語を取っちゃうというものもあると思うんですけどね。これをわざわざ入れる。多言語対応というのは、既に入っているの。

これ、方向性のつくり方に関係あるんですけど、似た項目の意見を集めて。それで、似たというか、項目は同じ意見を集めて、似た発言は一つにしてみたいな感じなんです。なので、こういうふうになってしまっているというのはあるんですけど。

でも、それで違和感があるのであれば、修正はしていきたいと思いますが。

【片山委員】 確かに、おっしゃるとおりで英語などなどみたいな。ちょっと。

【吉本副座長】 そうですね。中国語、韓国語の前に、確かに、そういうものを入れたほうが。

【片山委員】 2番目は、むしろフランス人だったら、かえっておもしろいかもしれない。

【近藤理事長】 目立つかもしれませんがね。

【片山委員】 フランス人というと、みんな、えっみたいな。

【吉本副座長】 これ、どなたの発言だろうな。

【池田委員】 僕ですよ、それ、やたら雷門でフランス人にぶつかる経験を持って。

【池田委員】 選んでいないよ。いや、台東区の会議、結構、あそこの観光センターでやったりするからね。そうすると……。

【石田委員】 そうですか。フランス人に。

【池田委員】 フランス人。なぜかフランス人。

【片山委員】 でも、あくまでも委員の意見だから、別にそれでもいいわけですよ。

【吉本副座長】 そうなんです。委員の意見なんですよ、ここは。

【池田委員】 ちょっとね。

【片山委員】 ただ、イタリア人の人気はないのかとか。

【池田委員】 イタリア人。いや、この間、神田明神下でアニメオタクのイタリア人夫婦というのに出くわして。

【片山委員】 神田明神とか、すごく多いんだよね。

【池田委員】 甘酒飲んでた。

【片山委員】 アニメタウンで、聖地ですね。

【池田委員】 秋葉原に向かう坂道で。

【吉本副座長】 ご意見は大体。

住吉さん、ほかに何かないですか。大丈夫ということですか。

【住吉委員】 いえ、特に。まとめていただいて、ありがとうございます。

【近藤理事長】 ちょっといいですか、時間があるからひと言。1ページの真ん中の四角の下の最初のオーケストラを取り巻く云々とオーケストラの社会的な役割を、ほかにも出てくると思うんですが。

【吉本副座長】 重なっていますか。

【近藤理事長】 いや、そうではなくて、オーケストラの社会的役割が何かというのは、誰も明確な定義はしていない。だから、そのままいいのかなとは思いますが、何か現代の流れの中で、オーケストラにはこういう役割があるんだということを短い言葉で言えたら……。

【池田委員】 社会的役割というか、そのまちの文化の顔というのは、もうどうしても。歴史的にも現代的にも外せないことです、やっぱり。何だっけ、親の顔が見たいじゃないけど、そのオケを見たら、どの程度音楽なり文化がそのまちで愛されているのか、必要とされているのか。やっぱり、だから、あらゆる意味で、オーケストラは、その地域社会の顔というのが、基本的な意味での社会的役割ですよ。そこから、いろんなものが派生し

ていく。

【片山委員】　　ここで、何かそういう文化的とかじゃなくて、社会的という言葉が生きているのは、きっと私の想像では、やっぱり2番の話とか。今の順番だと、2番の市民、コミュニティとか、こういうのと、多分都響だからということで、多分そういうことを、私も申した記憶があるので、そういう言葉がちょっと生きてしまっているのかなと、もちろん、じゃあどうしたらいいですかね。

【池田委員】　　「オーケストラの地域社会における役割を明確にし」のほうはまだ……。

【片山委員】　　地域社会か。

【中根委員】　　何か、それだとちょっと、でも国際的にも。

【吉本副座長】　　そうですね。

【中根委員】　　ちょっと逆行しちゃうんですね。

【吉本副座長】　　地域社会だと、東京都だけみたいな感じがする。

【片山委員】　　何か頭で言うより、だから、僕は、今のが2番とかでそういうのが出てくるのはいいですけど。いきなり。

【吉本副座長】　　そうですね。

【片山委員】　　地域社会もだけど、まず世界的、国際的、文化、文化・芸術、社会、広いことですから、ここで出てくるべきニュアンスは。

【近藤理事長】　　音楽には先ず、人の心を豊かにするという役割がある。しかし、それが次第に、社会の流れにより変わってきて、社会的な役割、取り分け社会的包摂とか、弱者を一緒に育てるといのように、文化的役割から社会的役割に広がってきたと思います。そして今やグローバル化が進んでいるので、今度は地域の顔だということになりつつある。ただこれを全部言っていると長くなってしまう。

【吉本副座長】　　そういうことなんですね。だから、社会的というと、だから、例えばここをオーケストラの文化的役割、社会的役割としてもいいかもしれない。

【池田委員】　　もしくは、現代的社会におけるオーケストラの社会的位置づけを明確にしてとか。

【片山委員】　　現代的社会だったら、現代的社会における役割ぐらいでもいいかもしれないですね。

【池田委員】　　うん。そうですね。

【石田委員】　　はい。

- 【片山委員】 そうすると、やっぱりいろんなニュアンスを持つと。
- 【吉本副座長】 現代的社会における役割。
- 【池田委員】 うん。それを入れたら、現代的社会は、国内も地元も世界も全部入るから。
- 【石田委員】 それはいいですね。
- 【片山委員】 あとは、具体的な、もう、まさにこの1から6の話で具体的になっているということで、理解していただければですね。
- 【池田委員】 そうですね。
- 【石田委員】 現代的社会におけるオーケストラの役割を明確にし、存在価値を高める。
- 【近藤理事長】 もう一点、2ページの演奏プログラムの拡充のところですが、これまで現代作品を積極的に演奏してきたということが書いてありますが、日本人の作曲家も扱ってきたという点は出なかったでしたっけ。
- 【片山委員】 現代作品。
- 【近藤理事長】 現代作品。
- 【池田委員】 委嘱新作が2作か3作あっていい。
- 【片山委員】 でも、日本人と無理に限定しなくても、こういうところはいいかもしれませんね。あるいは日本人の作曲、だから、ちょっと別に1個立てるぐらいのほうが。現代作品というと、日本人が何か一緒に。外国人はじゃあどうなっているんだということは、わかりにくくなるのは余り好ましいことではないので。
- 【吉本副座長】 実際の特徴として、日本人の新しさを取り上げようというのは、都響のプログラムでは重視されているんですか。そういうわけでもない。
- 【片山委員】 かつては、そういう時代もあったし、今でも、もちろんご苦心になさっていろんな形で立ち上げようとは。
- 【池田委員】 過去のある作品を取り上げることに依然として熱心だし、大野さんが海外の新作をやるのも熱心だけど、逆に日本人に新作を委嘱するというアクティビティはちょっと一時に比べるとおとなしいかな。
- 【小川GM】 副座長、すみません。堤座長からいただいている意見で、ここ、「邦人作曲家も含む」と入れたらどうかというのは。これは堤座長から。
- 【池田委員】 さすが。
- 【片山委員】 さすが……。
- 【吉本副座長】 さすがですね。「都響の強みは」の後ろですか。それとも、委嘱新作の

前に。

【小川GM】 「委嘱新作が毎年2つ、3つあってもいい」の前に、堤座長からの意見で、「邦人作曲家を含む委嘱新作が」というふうに変えれば。

【池田委員】 ばっちり。それで解決。

【片山委員】 そうですね。ここで、どっか、とにかく日本人の作曲家もというのは、一言はどこかで。

【吉本副座長】 そうですね。入れたいなと思います、私も。

【片山委員】 はい。

【石田委員】 日本人の定義がだんだんわからなくなっている。

【池田委員】 まあ、コスモポリタンですよ、藤倉さんとかね。

【石田委員】 そうなんです。

【吉本副座長】 邦人というのか、そのあたりの言葉を選んで。

【片山委員】 もう余り邦人は、今は言わないほうがいいと思います。

【石田委員】 邦人ではないほうがよいかもかもしれません。

【片山委員】 邦人作品ということは、クラシック音楽界では、ずっと長年使ってきて、最後まで、邦人という言い方が残っている。

【吉本副座長】 そうですか。

【池田委員】 日本人作曲家を含む委嘱新作が年に二、三作という。

【吉本副座長】 日本人のほうがいいですか。

【池田委員】 はい。

邦人って、何か最近言わないですよ。

【片山委員】 言わない。結構、最後までいたんですけど、最近使う人減りましたね。

【池田委員】 邦人、異邦人は、やっぱり差別的な。

【片山委員】 そうですよ。

【池田委員】 要するに俊別になるわけか。

【近藤理事長】 外務省では、邦人保護という言葉が使われます。武漢から退避させる対象となる国民というときに使います。

【吉本副座長】 あれは邦人ですよ。

【池田委員】 古い言い方なんだよね。

【片山委員】 でも、ああいう言い方がずっと残っていたんですよ。日本の作曲家に対

しては。邦人作品の魅力を語るとか。

【池田委員】 石原都知事も三国人とか、平気で言っていたものね、記者会見で。

【片山委員】 三国人。ちょっとそれは問題ですね。それは問題ですよ。

【池田委員】 でも、現代社会におけると言っておけば、オリンピック以後も視野に入れているとわかってもらえるからいいですよ。変に2020以降をおもねた提言じゃないですよということだね。

【片山委員】 そうそう。それだと、すぐもう滅びちゃいますから。もうことしになっちゃいましたから。

【池田委員】 終わったら、クラシック音楽大不況説があるから。2021年。

【片山委員】 もう予算もね。

【池田委員】 バッサリなくなって。

【近藤理事長】 そうですか。

【吉本副座長】 予算がなくなって。

【池田委員】 いや、というよりオリンピック・パラリンピックが終わったら、はい、さよならと。

【片山委員】 それは、文化芸術に対する全般的な話で、まだ、よくわからないという。一遍に切られてくるんじゃないかと、皆さん、おっしゃいますよね。

【池田委員】 かなり、みんな恐怖とともに、ことしの繁栄を享受している。

【片山委員】 そろそろ、怖いですね。

【池田委員】 ちょっと紀元二千六百年的なところもある。

【片山委員】 次の年から、たしか削られて。

【近藤理事長】 細かい話で、一点、2ページの一番下、アジアに出かけていくという部分で、演奏だけでなく、音楽教育を輸出するとあります。ここで言う音楽教育の輸出というのは、楽器を教えて演奏のレベルを上げるということだけではなくて、音楽を通して情操教育をすとか、音楽による人格教育というものも入っているのでしょうか。

【吉本副座長】 そうですね。これ、たしか発言のときのニュアンスは、いわゆるアウトリーチとか、普及活動のことだと思います。だから、音楽教育だと、ちょっと確かに意味が不明確ですね。これは、じゃあもう一回。

【池田委員】 普及活動の。

【吉本副座長】 何か演奏活動をやり、アウトリーチもやりという両方をパッケージでと

ということだと思っんですね。

【池田委員】 輸出という言葉は、何か商売チックで。

【近藤理事長】 ちょっと経産省みたいな。

【池田委員】 発想、やっぱり国外展開とか何かね。

【石田委員】 ここは、そうですね。澤学長がお話しされていたんですかね。

【中根委員】 澤先生でしたね。

【石田委員】 大学、高等教育でしたよね。高等教育が、例えば中国とか韓国で力を入れているという話だった記憶が私はあるんですけど。

【近藤理事長】 いや、確かにそうでしたね。

【吉本副座長】 そうですね。僕の記憶違いですね。

【池田委員】 演奏だけでなく、音楽教育面のサポートというところでも期待できるとか。市場という言葉もよくないですよ。輸出とか市場とかね。何となく、かつてのエコノミックアニマルチックな雰囲気が漂う。

【吉本副座長】 サポート、これは支援というのがいいかもしれないですね。音楽教育の支援とかね。

【池田委員】 というところでも期待できる地域である。

【吉本副座長】 期待できるでいいじゃないですか。

【池田委員】 期待できるでいいですよ。市場という言葉はもうやめて。

【吉本副座長】 確かにやめたほうがいいですよ。

【池田委員】 もうけにいくみたいでよくないです。

【近藤理事長】 クールジャパンを輸出してもうける為の資産とみるといった方向に勝手にいってしまう。

【池田委員】 何でもあの国のやつは商売にすると、また言われるからやめましょう。

【近藤理事長】 あとは、さっきのオーケストラの社会的役割という言葉は、もう一か所出てくるんですね。4ページの①の最初に。

【片山委員】 本当だ。

【近藤理事長】 これも、さっきの表現と合わせてはどうでしょう。

【吉本副座長】 現代社会における役割ですね。

【池田委員】 次に地域も出てきますからね、この。そうですね。

【石田委員】 ここはこれで。

【片山委員】　そこはこういう話で。

【吉本副座長】　ほかにはいかがでしょうか。

あと、事務局あるいは国塩主幹とか栗盛さんで、気になるところがあれば、これは、ちょっと事実と違うとか、もうちょっとこういうふうに書いておいてもらったほうが、受け取った側はやりやすいとかというのがあれば、ちょっとざっくばらんに意見を伺いたいと思ったんですけど。

【国塩芸術主幹】　事実誤認がなければ、提言なので、自由にいただいたほうがよいかと思えます。こちらから、こう言ってくれという話でないような気がするので、客観的に都響を見て、このように思うという意見が大事だと思えます。

【片山委員】　何か明らかな事実誤認とか、これも、十分やっているのに、やっていないように書いてあるとか、そういうのはないですか。

【国塩芸術主幹】　それは見方によりますから。

【片山委員】　そうですね。

【池田委員】　でも、楽員さんたちのヒアリングとかは、とってもおもしろかったです。

【吉本副座長】　そうですね。本当に。

【池田委員】　特に印象に残っているのは、ノルウェーの若い指揮者。

【吉本副座長】　矢部さんの。

【池田委員】　何だっけ。

【栗盛GM】　マケラ。

【池田委員】　フィンランド人、あの。

とにかく指揮者に何かベテランとか何とかじゃなくて、二十歳でも振れるやつは振れるんだとあって、明確に巨匠崇拝を否定して、プレイヤーの側からいい指揮者の基準というのがああいうところに出ていて、ちょっと自分としては新鮮だったから。

【片山委員】　そんな話があるんですね。

【池田委員】　うん。ああいう発言も何かこの提言とは別に、楽員の側からの考えというものが、ああいうふうに伝わって出てくると、お客さんはおもしろいなと思うんじゃないかなと。何か、もうちょっと楽員それぞれがそういう発言をして、人がおおっと思うようなチャンネルというのがあってもいいかなと思いましたけど、あれ。非常に、僕が読んでいてもおもしろかったです。

【近藤理事長】　この提言が一旦出て、公開された後どういう反応を期待されるのかなと

思っています。提言をされた我々つまり都響の側が社会に対して何らかの反応をしたほうがいいのか。あるいは部内で楽員と議論するのが大切であるなど。

「いい提言いただいた、皆さんこれでいいですねとって、ファイルして棚に閉まってしまうてはいけないわけで、折角のよいアイデアが、ずっと、彼らの心の中に生き続けるための仕組みみたいなものをちょっと考えたいと思っています。

あるいは、3年後、5年後に、もう一回この会を開いて、どうなったかをみんなで話すのもいいかも知れません。

【吉本副座長】 検証ですか。

【近藤理事長】 どれぐらい実現したのかを見るとか。

【石田委員】 できたかどうか。

【吉本副座長】 そうですよ。

あとは、ちょっと、この提言の活用方法みたいなことで、私が個人的に思っていることは、一つだけあるんですけど、これを、最終的に調整したものを堤座長から近藤理事長にお渡しするという、儀式はなくてもいいと思うんですけど、受け取ったら、この特に拠点ホールのところなんですけど、今、都立文化施設の指定管理者制度のことをちょうどやっている最中なんです。次の議会か、次の次の議会、この指定管理者制度のことをどうするとずっと決まらなくて、最近やっと決まったんですよ。なので、現役と、それから、文化会館の指定管理者制度の要綱の中に、都響の本番をやるときは、リハもそこで使うみたいなことを書き込んでもらったら、そこを実現すると思うんですよ。

【近藤理事長】 なるほど。

【吉本副座長】 そこを書き読んでもらうための手段として、ちょっと勝手なんですけど、これを近藤理事長が受け取ったら、ぜひ大野さんと一緒に、生活文化局の局長、浜さんを訪ねていただいて、こういう提案をいただきましたと。

【近藤理事長】 うん。なるほど。

【吉本副座長】 で、この3つの中の3番目なんですけどというので、今、指定管理者制度の議論をされているようだから、何かそれをご検討いただけないでしょうかという、具体的にアクションに使っていただくのは。

【池田委員】 東京文化会館ができて、来年で60年。61年に開館しているので。それで、今都響が練習に使えない最大の理由は、何年か前の改修のときとか、組織変更、その直営から歴文に移す、何かのときにオペラやバレエなど、舞台芸術の殿堂というふうに規

定してしまったことによって、交響楽団が練習場として、大ホールの本番舞台を使えないという結果が生じているんだけど、それは61年に開館した時点には、影も形なかった取り決めであって、今は、それを盾に使えないということになっているんですけど、なら変えればいいだけの話を変えられないということの不思議をこの何年か思ってきました。

【吉本副座長】 多分、芸術劇場にコンサート専用ホールができたということも、その背景にはあった。

【池田委員】 今や外国から我々を呼ぶのが国際文化交流なんて時代は、もう20年ぐらい前に終わっていると思うので、それを優先的に使わせるために、オペラ、バレエ団の舞台芸術の殿堂という規定が後からつけ加え、それによって、本来の東京都のちゃんとした文化団体がここに事務局まで置いているのに、きちっと使えないというのは、そろそろ、それこそ局長に、はっきり言ったらいいことだと思いますよ。

【吉本副座長】 池田さんのご発言は、前回もあって、それを11ページの一番下に……。

【池田委員】 うん。一番やわらかい形で。

【吉本副座長】 一応入っているんですね。

【池田委員】 文言部分を整理してね。

【住吉委員】 最大限のところまで。

【池田委員】 そう。最大限のところですよ、これで。でも、何を言っているかは、伝わるでしょう。

【片山委員】 ここをちょっと強調してお伝えいただくような言い方ですね。

【池田委員】 そうですよ。やっぱり気の毒だと思いますよ。そんな何年か前に勝手に決めちゃった亡霊が、いまだに新しい世代を縛っているというのは。

【吉本副座長】 特に、リハを本番のホールでやるというのは、たしか、一番最初に大野さんがおっしゃったことですよ。

【池田委員】 そうですね。

【吉本副座長】 一番強く問題意識を持っておられると思うので。

【池田委員】 それを途中でスルーしたことに気づいて、慌てて、議論をそこに持って行って。

【吉本副座長】 そうですね。最後に議論しましたね。

【片山委員】 新設、新しいホールを建てるというニュアンスが最初は強くおっしゃったという記憶があったんで、文化会館の有効活用というのは、すごく現実的ですよ。

【近藤理事長】 そういった交渉に必要なレバレッジは我々は持っていません。むしろ、ギブ・アンド・テイクで進めるしかなく、何かギブするものがあるかという、そういうものはないのですよね。

【吉本副座長】 もう少し現実的に踏み込んで考えると、じゃあ文化会館で、文化会館の定期は年何回やるんですって。

【国塩芸術主幹】 年8回です。

【吉本副座長】 8回。で、本番のリハは、その前の1日で大丈夫なんですか。

【国塩芸術主幹】 3日間ですね。

【吉本副座長】 3日間。そうすると、 $3 \times 8 = 24$ ですね。 $3 \times 8 = 24$ 日間、貸しホールの収入が入らなくなる。

【国塩芸術主幹】 本番も入れると $4 \times 8 = 32$ です。

【吉本副座長】 でも、本番は今も使っているんですよね。それはホール代は払っているんですって。

【国塩芸術主幹】 そうです、はい。

【吉本副座長】 払っていますよね。その30何日分を都響がホール代まで払えないと思うんですよね。そうすると、じゃあ東京都の側からすると、収入が減るじゃないですか、その分。それが幾らなのかというようなことの話になってくると思うんですよ、現実を見ると。

【片山委員】 そうですね。

【国塩芸術主幹】 だから、基本的には、東響にしても、新日本フィルにしても、ホール費を払っていますよね。ただで使っているわけじゃないです。そんなことはあり得ないわけで。

【池田委員】 でも格安なんでしょう。

【国塩芸術主幹】 唯一日本で例外と思われるのはオーケストラ・アンサンブル金沢です。あそこは、石川県立音楽堂とオケが一つの財団で、ホールはオケのためにあるという大前提があるので、必ずアンサンブル金沢のリハーサルが最優先なんですよ。他はフランチャイズといっても、割引きがあるという程度のはずです。

だから、文化会館を使わせてもらっても、我々のほうは、やっぱり使用料のことは考えなきゃいけません。

【吉本副座長】 まちのホールですからね。

【国塩芸術主幹】 ホールも維持費が必要ですから。そういうことは、オーケストラも考えた上でやらなきゃいけないことですし。

【近藤理事長】 どれぐらいあればいいのか、予算が。

【国塩芸術主幹】 まあ、普通は、リハーサルの場合、半額とかという話でいくでしょうし、ただ、それを言うと、ホールとしては外部の団体に貸したほうが収入になるではないかという、経済的な議論が起こるんです。

【近藤理事長】 うん。

【吉本副座長】 最後は、そのせめぎ合いになりますよね。

【池田委員】 でも、やっぱりこのアンケートのとおり、東京のトップ3オーケストラがそれぞれ、それぞれの事情で、練習場と本番が違うというのは、かなり不思議な状況ではあるんですよ。まさに世界の文化都市比較としてはね。だから、東京都として、見識があれば、都響への補助金の一環として、ただとは言わないけど、格別の条件でお貸しするという。

このホールのじゃあ音響がいいとか悪いとか、そういう話に次はなるんですけど、大阪のザ・シンフォニーホールが1980年ぐらいに残響2.5秒と、当時、ゼネコンが新聞ですごいキャンペーンを打って、残響の長いのがいいホールみたいな、あしき常識が生まれてしまって、曲によっては、やっぱり文化会館のほうがよく響くものも、よく聞こえる、響き過ぎないでよく聞こえていいものもいっぱいあるし、前回か前々回の会議でも発言しましたが、大野さんがバルセロナのオケでやったトゥーランドットも、やっぱり演奏のクオリティーは何回かやった後の新国立劇場のほうがよかったですけど、やっぱり新しい、2年間限定のフェスティバル初日という、その祝祭的というのか、モニュメンタルなあれとして、東京文化会館の持っているレジェンドとか、ポテンシャルに圧倒されたというお客様が随分いました。やっぱり、東京で一番の小屋はこっちだって、初台じゃないという。何人かの何年もオペラに通っている人は僕に言いましたから、そういう意味では、ここのホールというのは、総合点でそんな悪くないので、ぜひ都響との一体的なイメージを持ったほうが、よりはっきりといいイメージを持てるホールになれると思うし。

【吉本副座長】 そろそろお時間だと思いますけど、何かほかに。

【中根委員】 いや、もう大変いろんなことを勉強させていただいて。この報告書を実際に見て形になっていくというところもありますので、そういう意味では、一緒に皆さんと働かせていただいて、本当によかったと。いい経験をさせていただきました。ありがとう

ございました。

すみません。きょうは、ちょっと別の会議があって、早目に中座させていただきます。
ありがとうございました。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。

【近藤理事長】 この提言をいただいたら、打ち上げをやるんでしょう、また。3月か4月かね、やりましょう。きょうは、最後ではない。

【吉本副座長】 そこで、最後にしますか。座長から渡していただく。

そして、それで、そういう写真と一緒に公開するというのもありでしょうね。

【近藤理事長】 そうそう。

はい。ご意見としていただきます。

【中根委員】 じゃあ、失礼いたします。

【池田委員】 ありがとうございました。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。

それでは、いろいろご意見いただいて、どうもありがとうございました。何か一通りご発言をいただいたような気がしますけど、それ、ほかには特にはよろしいですか。

はい。じゃあ、あとは、この後、また修正作業等、事務局とも相談しながらやらせていただいて、最終的な確認というのは、堤座長にも返答を事務局を通して確認いただくか、場合によっては、私、お目にかかってご相談してもいいかなと思っていますので、座長、副座長に最後のまとめはご一任いただくということで、よろしいでしょうか。

(異議なし)

【吉本副座長】 はい、ありがとうございました。

じゃあ賛同いただいたということで、本日、いろいろいただきましたご意見も踏まえて、報告書の修正を進めて、最終を作成していきたいと思います。

では、きょうが、打ち上げをやるということになりましたけど、懇談会としては、きょうは最終回ですので、近藤理事長のほうから一言いただけますでしょうか。

【近藤理事長】 7回の会合で、私、毎回本当に楽しく勉強させていただきました。そして、最後に、吉本さんに取りまとめをお願いして本当によかったと思っています。わかりやすく、ポイントを突いた良い提言...でなくて、提案でしたっけ。

【吉本副座長】 提言です。全体は提言です。

【近藤理事長】 ええ。いただきまして、本当にありがとうございました。委員お一人お

一人の立場から、それぞれの多様だが基本的には都響のことを思い、あるいは日本のオーケストラ全般、クラシック全般に対する熱い思いと信念をもって頂いて、良い提言を頂きました。

クラシックの将来に関する客観的な情勢は、必ずしもバラ色ではありませんけれども、こういった方々が要所要所におられるということは、これからの日本のクラシック、ひいては世界のクラシック界にとっても、心強いことであるし、海外との連携、ほかのオーケストラとの連携といったような提案もありましたけど、そういったことも含めて、これを糧として、予算の獲得も含めて、そして、施設に関する交渉などもできる限りやって、このご期待に少しでも応えるようにしたいと思います。本当にありがとうございました。

【吉本副座長】 どうもありがとうございました。

委員の皆さん方は、第1回から本当にいろいろなご意見を頂戴しまして、私も、とても学びの多い懇談会でありました。どうもありがとうございました。

懇談会は、今回、最終回になりますけども、先ほど打ち上げの話も出ましたので、それまでには、ちゃんと報告書を完成させて、皆さんで、もう一度集まることができたらなどというふうに、私も思いますので、よろしくお願いします。

じゃあ、事務局のほうからお願いできますでしょうか。

【小野事務局長】 本日はありがとうございました。

委員の皆様には、報告書を完成するまでということで、まず任期を延長いただきまして、ありがとうございます。この後、報告書のとりまとめまで、ぜひどうぞよろしくお願いいたします。

報告いただきますのは、どういうふうな形にするか、それから、いただいたものをホームページにあげる、あるいは都にどういうふうに報告する。あるいは、私どものほうで、次の中期計画に盛り込む、どういうふうな形でさせていただくかというのは、これから検討させていただきたいと思いますが、今後とも、委員の皆様には、ご指導ご鞭撻いただければと思っております。

本日、会としては最終回ということで、7回ですね、東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会という形で、本当にありがとうございました。

これをもちまして、よろしいでしょうか。

この懇談会、閉会とさせていただきます。どうも本当にありがとうございました。